



「人と言葉」

名誉会員（第二代会長）

田 中 守

片木会長から「全国歯放技連絡協議会創立 20 周年記念に何か書いてよ。」と云われ、引き受けたはいいが、何を書いたら良いのか、会創設の経緯とか、自分が会長であった期間についてか、多分その辺の事だと思われるが、会創設の意義、経緯は初代会長の西岡先生が書かれるだろうし、そこで会創設に至る経緯から総務を 7 年間、会長職を 6 年間経歴した約 17 年間にいろいろな人達との出会いや別れがあり、そして、語らい、議論し、酒を飲み付き合ってきたことの中から「人と言葉」について書くことにした。

思っていることを相手に伝える方法としては、言葉、文字、映像、信号、手話、その他さまざまな電子機器類を用いる方法などがあるが、しかし、最も一般的には言葉と文字と映像であり、また、その三者を上手く組み合わせた表現法であろう。

これから書くのは、**おや、すごい、さすが**、と私が色々な人の発言に勝手に感銘した言葉とか文章である。さまざまな歴史をひもといてみると、ある人があの時こう云った。それにより何かが変わった。このような事はいくらでもあるし、その相互作用によって歴史は創られると云える。

（会創設以前）

私が鶴見女子大学歯学部附属病院に勤務したのは 1970 年（昭和 45 年）10 月 1 日であった。その翌年に第 12 回日本歯科放射線学会総会が神奈川歯科大学で開催された時、昼食を取りながら 5～6 人の技師が集まり、多分、閑野先生だったか西岡先生だったか、定かでないが、誰々先生に相談したら、技師の集まりをつくるのは時期早々であると反対された。との事で、その後なんの動きもなかった。

それから 17 年後、1987 年（昭和 62 年）の 5 月に日大の**西岡敏雄氏**の「今後われわれの技術交流をはじめとして、各種の連絡を進めて行きたい。」との呼びかけに応じて関東地区の 7 名の技師長クラスの人が集まり、勉強会が始まった。これが連絡協議会発足への第一歩である。また、このとき、**閑野政則氏**から「放射線に係わる各職種を調査してみると、法的にも種々の組織があり、歯科では技工士会、歯科衛生士会も自主性のある見識を持って活動している。」と聞いた。

このような経緯で、10 月に広島で開催される第 28 回日歯放総会時に放射線技師のみの懇親会を開催し、全国組織をつくることの相談をする事となった。

そこで全国 29 歯科大学、歯学部の 30 病院に勤務する 101 名の診療放射線技師に趣旨説明書を送り召集したところ 17 名が出席するとの事で、広島大の砂屋敷忠技師長に世話人をお願いした。砂屋敷忠氏は、1983 年に医学部から歯学部へ転任されて来て、そのとき**西岡敏雄氏**が、「今度歯学部へ医学部から大物の技師が来てくれた。」と大喜びされたのを覚えている。

砂屋敷忠氏からの文書には「広島のごことはまかして下さい。国立大学放射線技師会は医、歯が一緒になって技師定員の増員をテーマにしているのです、皆様のお力添えをお願いする。」との力強い応援を頂いた。

広島で会設立の賛同を得られたので、関東では勉強会を続ける一方、会の名称、目的など規約案の検討

が始まった。第 29 回日歯放総会は札幌で開催、東日本学園（現：北海道医療大学）の輪島隆博技師長が世話人であった。出席者 13 名で、席上様々な意見が交わされた。

「ねえ皆、とにかく悪い事じゃないんだから技師の会をつくろうじゃないの。」と、**輪島隆博氏**の発言で設立が決定し、1990 年に「全国技師長会議」を開催する。代表者は日大の西岡敏雄氏とする。規約を作成し、来年の鹿児島にはかる事になった。このときの輪島氏の発言は、いささか不安を持っていた我々に自信を与えてくれた。いまでもあの一言は鮮明に蘇ってくる。1989 年 10 月 19 日第 30 回日歯放総会は鹿児島で開催、鹿児島大学の米倉誠耕技師長が世話人であった。18 名が出席して全国歯科放射線技師連絡協議会設立総会が開催された。会長：西岡敏雄、副会長：砂屋敷忠、会計監査：米倉誠耕を選出し、第 1 回総会は東京で開催と決まった。このとき世話人であった、**米倉誠耕氏**は、鹿児島県技師会長であった。翌年に定年退官をひかえておられ、「このような会が出来て歯科の放射線技師の地位向上につながればこんな嬉しいことはない。」とおっしゃっておられたのが印象的であった。

（総務として）

第 1 回総会開催。東京医科歯科大学の**五十嵐雅晴技師長**が「私で役に立てれば」と佐々木教授を説得されて快く引き受けて頂いた。私は、会長命で総務を引き受け、事務・連絡・手配など何でも屋であった。

さて、問題は何校、何名出席するかと不安であったが、25 大学 26 病院が参加と非常に高い出席率でほっとした。なかでも九州大学は技師全員で来てくれて、**加藤誠氏**にどうしたんですかと聞いたら、「いや、この会は歯科で働く放射線技師がメインにすべき会だと僕は思っていますから。」と云われてこんなに心強く嬉しい事はなかった。

また、**佐々木教授**の「最新の放射線機器を真に歯科医療にとって有用なものにするには放線技師の役割は極めて大きいと云えます。」「腫瘍やのう胞性疾患の診断の成否は放射線技師の提供する画像の質にかかっている。」「最小の被曝線量で良質の画像の提供。さらに経費の節減は、歯科医師と放射線技師が協力し合えば必ず達成出来る。」の格調の高い祝辞は、20 年経った今でも変わらない真実である。

西岡会長の最大の功績は会を立ち上げたことはもちろんであるが、総会での討議内容を一般会員に知らせるため、また、この会の存在を広く知って貰うために各大学の病院長、放射線科教授、図書館に寄贈するために年 2 回の会誌の発刊をしよう」と事業計画として最初にとりあげ実行された事である。

第 2 回研修会は、昭和大学の山中孝明技師長のお世話で開催。フリー討論の「職場における自己開発」で演者の大阪大学**角田明氏**の発言で、「世の中いろんな仕事があるのにどうして自分が放射線技師をやっているのか不思議に思う。」この発言を聞いて、そう言えば俺はどうしてだろう、どうしてここに居るんだろうと自分の過去と将来について考え込んだ憶えがあり、これはたぶん自分だけではなかったと思う。

第 3 回研修会は、東京歯科大学の藤森久雄技師長のお世話で開催、特別講演は**黒柳錦也教授**の「書誌学的に見た歯科放射線学の歴史」で、「十分に文献を整理し、本をチェックすることです。学問の王道はこれしかありません。」と話されていましたが、当時あまり気にもしませんでした。しかし、いざ自分が歯科放射線関係の歴史を書くときに、その重要性を認識しました。黒柳先生はつい最近亡くなられましたが、先生の書かれた「歯科 X 線 101 年」－ X 線発見と歯科への応用－は大変参考になった。

第 4 回研修会は、九州大学の加藤誠技師長のもとで開催され、この会は**加藤技師長**の情熱が総会回顧に現れていました。「この連絡協議会の存在を有効に利用し、全国 28 施設の放射線技師それぞれがテーマを毎年クリアーしていき、それを持ち寄る事で大学としての機能を十分に発揮出来るであろう。」そのた

め演題数をしばった。

また、フリー討論「患者への対応について」では、司会の**閑野政則氏**はそのまとめの中で「**技師の態度で大切な事は、患者さんに信頼される人格が必要で、年収の5%を生涯教育費として費やす事が必要である。**」と云っておられたが、さて、自分は何%かな？とその時考えた。

会誌に原稿を書いて頂いたこともある国際医療福祉大学の**金場敏憲先生**は、奥さんと結婚されるときに、「**収入の三分の一は自分の勉強（学会、研究、交際など）に使うから。**」と宣言されたそうで、**凄**い人があるもんだと感心した。

第5回研修会は広島大学の砂屋敷忠技師長のもとで開催された。

砂屋敷技師長は、日本放射線技術学会の重鎮であり、「**技術学会学術大会で歯科領域の演題郡を設定しても良いと云う話を持ち上がりました。そのために演題提出を積極的に勧める必要があります。**」と提言され、砂屋敷先生のご尽力により、数回歯科領域のセッションが設けられた。

さらに、歯科医療機関で働く放射線技師の人材確保について、「**歯科医療の現場は、対等なチーム医療がそだっていない、将来は、歯科衛生士、歯科技工士の団体とも協力する必要がある。**」との提言があったが、残念ながら未だ実現していない。

第6回研修会は大阪歯科大学の竹信美保技師長のお世話で開催された。

田中義弘先生の特別講演では、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の医療活動において、「**大震災で電気が止まると、CT、MRI、X線装置など何も使えなくなる。そうすると今の医者は診療が出来なくなるように教育されている。**」との問題点を指摘されていた。

また、技術研修会のセッションでは、CCDでなくIPを用いた口内法デジタル画像について**舟橋逸雄氏**が「**エクタプラスの5倍の感度があり、画像をデジタルデータとして保管でき、再撮影が少なくなる。**」と発表され、デジタル時代の到来を予感させた。

第7回研修会は北海道医療大学の輪島隆博技師長のもと、時には変わった所で行おうと北海道支笏湖畔で開催した。**輪嶋氏**曰く、「**特別講演はいつも放射線科教授だし、たまには違う話を聞こうよ。**」と、レントゲン車を駆って人間ではなく馬や牛の診断をしている獣医臨床放射線学講座の広瀬恒夫教授に講演を依頼し、獣医大学にも放射線の講座がある事と、透視、撮影、現像が出来るX線搭載車が存在することに驚いた。

この年は、定年退職のため西岡敏雄先生が会長を退かれ、私が丸橋一夫氏を総務にする事を条件に新会長に選ばれた。本当は会の実務を掌る総務の方が好きで、また、自分は会長と云う器でもないし、さんざん回避しようとしたが、上手く行かなかった。

仕方がないと1期か、多くても2期と思っていたら、3期6年やる事になった。

(会長として)

第8回研修会は、日本歯科大の伊藤嘉章技師長のお世話で開催。

この頃から角田明氏のおかげで会のメーリングリストが動きだし、そこに輪島隆博氏の「患者用防護エプロン無用論」がながされ、それをめぐって賛否両論となったため、これをフリー討論にとりあげた。

輪嶋氏の「**患者さんからみるとこのようなものを使うのだからやっぱりX線検査は身体に害があるのだろう。**」との反応があつて考えてしまった。」とのこと、この少し前まで私はJISの委員をやっていて、それも、歯科用防護衣に関するJIS規格の班長であった。その当時の問題は、襟を着けるかどうかだった

が、歯科用として特別に作る必要はないと止めてしまった。しかし、無用論までは考えなかった。さすが輪島さん。

第9回研修会は、徳島大学の坂野啓一技師長のお世話で開催。

近藤宗平先生に特別講演を依頼するについて輪島さんから送られて来たメールに、「科学は実験に基づくものである。実験は予想通りいかないことがある。失敗や意外なことがあって初めて真理に一步近づく。」この近藤先生の文章が素晴らしいこと、「会は100人位が一番良い、多すぎると駄目になる。」という言葉は、今でも印象的な言葉として心に残っている。懇親会場での阿波踊り楽しかった。

第10回研修会は東北大学の古村光政技師長のお世話で開催。

笹野高嗣教授の講演では、症例の多種多様さ、「口腔は全身の鏡である。」の言葉。また、新井嘉則先生が歯科用CTを開発するきっかけとなったのが、「顎関節を3次元的にみる方法はない？」と云う本田先生の一言。であったとのこと。云った方も云われた方も、それで夢が実現したのだからすごい。

フリー討論は、丸橋一夫総務の「何時も同じ人が発言をして、マンネリ化の傾向があるので、グループに別れて討論したら。」との提案で、5グループに分かれて「我々の会でこれからやりたいこと」のタイトルで今までにない活発な討論がなされた。

1999年（平成11年）10月に第40回日歯放総会が神奈川歯科大学の当番で開催された。

この時、朝日大学の片木技師長（現会長）が尋ねて来られて、日本放射線技師会の「診療画像検査法シリーズ」の一巻として歯科に関する検査法の本を出版したい。我々の会で創らないかとの相談があった。片木喜代治氏の「現在出版されている歯科放射線の本は歯科医の書いたものばかりで、技師の書いたものは何もない、我々で創った本を技師学校の教科書などにも使ってもらいたい。」という片木氏の熱弁と、かねてからフリー討論などで要望されていたことも有り、会として全面協力することとなった。

第11回研修会は愛知学院大学の戸所利光技師長のお世話で開催。

有地栄一郎教授の特別講演は「介護医療における歯顎X線検査」で、当時開始された介護保険制度の施行にあったもので、「寝たきりの人や手が動かない、口が開かない、意思の疎通が出来ない様な人達の撮影をどうしたらよいか？」という問題を、我々の会に対してプロジェクトとして取り上げて貰いたいとの依頼がなされた。

また、広島大学の谷本啓二教授が教育講演「歯科放射線科で行う嚥下造影検査の実際」で、摂食、嚥下障害患者の造影撮影の大切さを説かれ、そして、「歯科放射線に勤務する放射線技師は造影剤、検査食、姿勢、機器、被曝などに関する知識を身につけることが急務である。」と話された。

鶴見大では、時間が掛かり、保険点数は安く、誤嚥の危険があり、Cアームのため被曝量も多く、また、時間外でないと出来ないという大変面倒な検査法であるが、谷本先生が無料でやっているとの話を聞いて少し気持ちが安らいだ。確か、この講演はこちらから依頼したのではなく、谷本先生の方から話したいと申し入れがあったので、その意味では我々の会も認められてきたと喜んだ。

第12回研修会は鹿児島大学の岡田淳徳技師長のお世話で開催。

佐藤強志先生の特別講演「口腔腫瘍の機能的質的診断の可能性」では、「静注10分位の集積の強さと、3時間後の集積の強さ比率がどのように変化するかによって、良性和悪性の見立てができる。この方式を腫瘍集積率と名付けられた。」と教えられ、核医学に疎い私でもよく理解できた。

また、フリー討論「将来、歯科病院は存続しているか」その対応・・・提言者：角田明。国立大学の独立行政法人化も間近に迫っており、角田氏の「少子化の進行・高齢化の進行・右下がりの経済・歯科医

師の過剰時代・正規職員の削減・仕事の外注化など、現況を見るとかなりの予測が当たっている。

これに対し、**閑野政則氏**の司会集約では、**今後、放射線技師が生き延びるには医科・歯科系に関係なく、「一定の技術を常に身につける。」「最低のコンピューター知識を持つ。」「語学が出来るよう常に研鑽する。」「読影レポートが書けるような医学基礎知識を学ぶ。」**21世紀の放射線技師は、高い教養と豊かな感性を身につけ、世界に羽ばたくような気概を持つべきだ。

閑野先生は博識でその絶妙な弁舌は素晴らしく、フリー討論の司会を何回もやって頂いた。

何時であったか定かでないが、**閑野先生**がかつて、**僕が放射線技師になって考えたことは「語学をマスターする。」「30才までは研究とか、勉強出来る所に所属する。」「同系の研究を3回以上続けて発表する。」**ことでその道の専門家として認められる。この三つの言葉は至言であると感じたが、現実にはその実行はなかなか難しい。

鹿児島大学の岡田淳徳技師長は前任の米倉誠耕氏に続き鹿児島県技師会長に就任され、二代続いて歯学部から、たいしたものです。**岡田淳徳氏**から**「小さいとは云え、全国組織の会なのだから、開催会長に表彰状を出すべきではないか。」**と、進言された。確かに叙勲などの審査のときには実績として評価されるようで、後からこのことを知り何とかすれば良かったかなと思った。

この年は、かねて懸案中であった日本私立歯科大学協会が後援する「全国私立歯科大学・歯学部附属病院診療放射線技師代表者会」を設立した。第1回会議は大阪歯科大学の竹信美保技師長のお世話で開催され、会長には日本歯科大学新潟生命歯学部の伊藤嘉章技師長が選出された。

伊藤嘉章氏いわく、**「俺会長なったけどさ、後はみんなそっちでやってよね。」**このおおらかさ。

いよいよ、私の会長任期も終わりが近く、さて、次の会長を誰にするかが問題となった。本来なら、二人居る副会長のどちらかと云うのが常識であるが、加藤誠氏も河田昌晴氏も引き受けてくれない。出来たら大学の多い関東で、と思って閑野政則氏、舟橋逸雄氏と打診したが断られ、苦慮していると、**河田昌晴**副会長が**「じゃ俺に任せてよ、別に関東でなくてもいいじゃない。阪大の角田明さんしかいないよ。」**彼なら識見、人柄、沈着冷静と打ってつけであると感じ、河田氏に説得を依頼して、了承を得た。

第13回研修会は松本歯科大学の深澤常克技師長のお世話で開催。深澤常克氏は、「どうせやるなら環境の良い所で。」と、山懐にある穂高のホテルを選んでくれた。

信州大学の橋蔵泰彦先生に依頼した特別講演「生体肝移植の実情」は、重量のある講演であった。

「肝臓は50年経っても人工的につくれない、重篤な肝不全患者を救命出来るのは肝移植しかない。」そして様々な実例を示され。私が一番感銘を受けたのは、**胆道閉鎖症の子供が黄色を乗り越えて、全身真っ黒になってベッドの上でシクシク泣きながらただ死んで行くのを待っている子供が、生体肝移植を行うことであつと云う間に目が白くなって退院できたこと。また、劇症肝炎で意識もなく失禁状態の子供が救われたことでした。**

また、教育講演の「遠隔医療の現状と将来」も時代を先取りした素晴らしい講演であった。

(会長を辞めて)

すぐに大学も辞めるつもりでいたが、大学の推薦で叙勲を受けたので、なかなか辞めづらく、ぶらぶらしていたら、当科の**小林馨教授**から**「辞める前に歯科の放射線技師の歴史を書いてよ。それが出来るのはもう田中先生しかいないよ。歴史がしっかり把握されていない組織は長続きしないよ。」**と云われたが、怠け者の私にはこれは大変な仕事で、なかなかその気になれなかった。たまたま、鶴見大学で連絡協議会

の会議があり、どうだろうかと話をしたら1、2年してから片木会長が会の事業として取り上げてくれた。

過去のファイル7冊と1～25巻までの会誌を読んでも、結構色々な、さまざまな、講演を聞き、そして問題を取り上げて討論を繰り返している。

最初2～3枚ぐらいの原稿予定がこんなに多くなってしまった。人の顔を思い浮かべると、「あっ、こう云うこともあの時云った。」と、切り無く出てくる。その意味ではこれでも大分はしょったことになる。

さて、世の中、日本航空が倒産状態、トヨタがクレーム続き、新卒者の就職率60%、不景気で購買力は低下しデフレ状態、失業者は増える一方である。さらに、歯科大学・歯学部の定員割れと厳しい現況がありますが、この会に蓄えられた20年間の知の力を活用され、今のところ比較的恵まれた職業でもありますので、この会の益々の発展を祈願いたします。